
SOLITUDE WAR

トロワ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S O L I T U D E W A R

【Nコード】

N 5 1 3 7 F

【作者名】

トロワ

【あらすじ】

日々平凡に過ごす自衛官、田中溪斗士長の部隊にある日出動命令が下った。内容はとある寒村を占拠した東欧系テロリストの殲滅と、誘拐された世界的大企業の社長の娘、暁鈴音の救出。しかし、敵はテロリストのみではなく異形の者まで現れ、田中士長は孤独で壮絶な戦いを強いられる。

FILE 1 プロローグ（前書き）

ご拝読ありがとうございます。皆様の暇を潰すお供になればと思います。ちなみに、内容的にはアクションとホラーの中間に位置しています。のんびりと応援よろしく願います。

FILE 1 プロローグ

目眩がする

ぼんやりと目を開けるとそこは銃弾が飛び交い、爆発が起こり、地面に銃弾があたり砂がはぜ舞い上がる世界
意識が朦朧とする中、俺の頭の中には一人の人が浮かんでいた。

「こんなところで死ぬ訳にはいかんな。」

俺は軽く頭を叩き意識を戻し、横に落ちている相棒でもある銃を拾い上げた。

「この銃はな、陸自の誇る89式小銃だ。口径は5・56mmで装弾数は30発。お前の黄泉路への案内者だ。」

乾いた銃声が辺りに響いた

事件の発端は、それから数ヶ月前に遡る。

とある気持ちいい秋晴れの平日。

訓練に勤しむ男がいた。

男の名は田中溪斗。

陸上自衛隊の通信科に勤務する陸士長だ。外国軍で言う上等兵の階級と言えはわかりやすいだろうか。

年齢は20歳。特徴はと言えば大柄で、あまり銃を使う事のない通信科だが銃には精通している。

しかし、別にレンジャー並みの体力があるわけでもなく、至って平凡な自衛官だった。

「ほら、ラスト一週だ、頑張れお前ら！」

今は武装走の訓練中で、重装備で銃を持ち走るといった競技の練習中だ。

しかも銃は旧式の64式小銃。新型（とは言っても配備されてから20年近く経過しているが）の89式と比べると顕著に重量の違いが身に染みる。

上官の激が飛ぶ中、田中は汗だくになりながら走る。

息は切れ、迷彩服も汗だく、足も痛みだしている。

「クソッ、早く終わらねえか。」

田中は苦虫を噛み潰したような表情でラストスパートをかけて疾走する。

ようやくゴールに到着し、肩で息をしながらゆつくりと歩くと、同期からお疲れさまとスポーツドリンクを渡された。

「ありがと。助かるぜ。」

一気に飲み干して同期を見ると、同期でもあり親友でもある高西士長に礼を言った。

「これメチャクチャキツイからしゃあないで。」

笑いながら田中の肩を高西士長が叩く。

教育隊からの付き合いだが同期の中では一番気が合い今に至る。

「とにかく今日はこれで終わりだから課後はのんびりしようや。」

そう高西に話すと、高西は険しい顔付きになる。

「今日はそうもいかんっぽい」

関西弁の訛りでしゃべる高西がそう言った。

「え？なんかあったのか？」

田中がそう聞くと高西は小声で話しはじめた。

「なんかな、最近俺らの管轄内のある田舎の村で不穏な動きがあるらしいで。」

不穏な動きってなんだ？と田中は考えたが、スッキリする答えは得られなかった。

「不穏な動きというと？」

高西が答える。

「なんかどこかの外国人やらが村でコソコソやってるらしい。詳しくは知らんけどその事で何か話があるんだとさ。」

説明した高西に田中がため息をつきながら答える。

「そんなん警察の管轄じゃねえか。わざわざ俺ら自衛隊が動くような事でもないだろ。」

「それがそうでもないっぽいで。とにかく1600に会議室集合だ。」

そして田中と高西は会議室へと向かい、事の概要を聞く。部屋には部隊の面々が揃っていた。

いつもの陽気でおちやらけた雰囲気は消し飛び、皆真剣な表情でプロジェクターに映された映像を見る。

映像は田舎の寒村の航空写真に始まった。

田舎の村と聞いていたのもっと小さなのを想像していたが、意外と大きな村だった。

田舎によくある木造の建物が無数に並び、集落の中心と森の中に巨大な屋敷が広がっていた。

後は木々が生い茂った森や山、田畑や川、集落があるだけだった。プロジェクターが次の映像を映し出す。

森の屋敷に人がわらわらと集まっている。

「これのどこが有事なんだ？」

田中は一人ぼんやり考えていた。

上官から説明がある。

「えー、現在この白鳥村では非常事態が発生している。」

非常事態？なにが起こってるんだ？

嫌な予感が体を駆け巡る。

「白鳥村では現在、東欧系テロリストが占拠している。この屋敷内が東欧系のテロリストと思わしき集団が拠点としている場所だ。」

テロリスト！？

最近物騒になってきたが未だ平和な日本にテロリストお！？

田中は驚愕して話を聞いた。

「ちなみに警察が地域住民からの要請を受けて出動したがことごとく殺害されたい。今回の事はマスコミには報道されていない。」

そこまで重大な事件なんて今まで無かっただろな。

「それと、世界的企業の暁グループのご息女の暁鈴音が数日前に誘拐された。

身代金を要求している。

額は50000ドルだ。

我々が作戦の要として出動する。」

田中は、聞きなれないドルに戸惑いつつも、人質を取ったテロリストに嫌悪感を募らせた。

さぞかし親は苦しんでるのだろう。いくら金持ちでも子供を誘拐されれば眠る事もできないだろうし食事も喉に通らないだろう。

「作戦開始は明朝の0500時。各員装備を準備するように。質問は？」

咄嗟に田中が拳手をする。

「なんだ田中士長？」

直属の隊長でもある1尉が目を向ける。

「何故我々なんですか？いえ、何故空挺部隊等が先に行かないんでしょうか？それに、我々通信科だけというのも疑問に思います。」

先ずは特殊部隊等のエリートが真っ先に向かうが常だ。

しかも、後方支援の通信科だけだなんて聞いた事がない。

「それがだな 言いだしにくいんだが」

隊長が言いだしにくそうに続ける。

「暁グループの総帥である暁源一氏が大事にしたいと言ってるんだ。もし過剰な反応をして娘を殺されたらとんでもないと聞かなくてな、無線等で連絡系が確実にできる我々だけの小人数での作戦になってしまった

こんな事では連携もとれる訳ないが、やるしかない。」

隊長は苦悶の表情で語った。

それはそうだ、部隊は他部隊との連携があつてこそ効率良く作戦を進められる。

我々だけでは連携もくそもない

「分かりました。ちなみに第1中隊や本部管理中隊は出動しますか？」

「いや、我々第2中隊だけだ。これはかなり厳しい作戦となる」

なんてこつた！

2中隊だけでの作戦なんて規模が知れてる。

田中は今改めて自分に死が近づいているのを感じた。

「よし、各人準備をせよ！別れ！」

隊員が敬礼をし、作戦に向けて準備を始めた。

この先地獄が待ち受けていることをまだ田中は知らなかった

FILE 2 監禁されし者

ここはどこ？

あれ？私は何してたんだっけ？

確か、大学終わって帰ろうとしたんだよね。

そこまでは記憶あるんだけどそれからどうしたんだろ？

迎えの車はどうしたのかしら

いつもならでっかい車で待ってるのに。

暁鈴音はぼんやりした頭で記憶がなくなる以前の出来事を反芻していた。

周りを見渡しても見えるのは狭い部屋で木の床と、入り口だろう場所には鉄格子がついてるだけ

「つて、えええ！？鉄格子！？」

一人驚きを惜し気もなく声に出してぶちまけた。

そう、鈴音がいる場所は簡単に言うなれば座敷牢。

堅牢な鉄格子に守られ、中にいる者を決して逃がさない檻だった。

「私なんでこんな所で閉じ込められてるの？」

首を傾いでうーんと唸りながら考える鈴音。

「まーったく分かりません。」

そのまま鈴音はポケットから携帯を出そうとまさぐる。しかし、ポケットには何も無い。

「ありゃ？携帯なくしちゃったよ。」

困った表情をしていると、鉄格子の向こうの扉が開いた。そこには大柄な白人が無表情で立っていた。

「才前、俺たちガ誘拐シタ。才前ノ父親ガ金ヲ寄越サナイト才前死ヌ。」

片言の日本語で白人男性は言う。
死ぬという言葉を使う時に、腰のホルスターにつけた拳銃をちらつかせた。

「誘拐？私誘拐されたの？死ぬってなんで？訳わかんないよお！死にたくないよ！ここから出して！」

鈴音は死ぬという言葉と拳銃で、これが冗談なんかではない事を悟った。

「俺たちハ金ガイル。ダカラ才前ヲ誘拐シテ要求シタ。モシ払ワナカツタラ代償トシテ才前ヲ殺ス。」

白人の男が無表情でそう言った。

人を、しかも女子供を殺すのを全く厭わない目だった。彼は殺すとなれば容赦なく誰でも殺すだろう。

そんな雰囲気漂わせていた。

それを察知したのか、鈴音は目に見える程萎縮していた。

鈴音の顔に浮かぶのは恐怖。ただそれだけだった。

「お願い！殺さないで！私死にたくない！」

必死の懇願も虚しく、白人は無表情に部屋の外からパンと水が入ったコップを鈴音の前に置く。

これが鈴音に与えられた食事なのだろう。
いつもの食事とは比べものにならない。

「飯ダ、食工。」

そのまま白人は部屋を出て鍵をかけてどこかへ行ってしまった。
誘拐されてから何も口にしてない鈴音は腹の虫が鳴り、前にあるパンを手に取り食べた。

いつもならこんなパン食べもしなかっただろうが、空腹の鈴音には
おいしく感じられた。

一気にパンを胃の中に収めると、水を流し込んだ。
こんな物でも生き返るようだ、と鈴音は一人ぼんやりと考える。

「私これからどうなるんだろ？死んじゃうのかな いきなりこんな
事になっても実感ないし、訳わかんないよ お父さんがお金払って
くれればいいけど。」

ここで暁鈴音の紹介、生い立ちを話そう。

鈴音の家庭は世界屈指の大企業だ。

暁グループという名を知らない者はなく、機械関係や電化製品に始まり、他にも日本では珍しい銃器関連の製造、開発にも着手し、幅

広く展開している。

一代で企業を立ち上げここまで大きくしたのは鈴音の父親でもある
暁源一の努力と人望だ。

もともとは中部地方の工場で働いていた源一は、人柄もよく純朴な
男だった。

ある日、

休日には伯父と山に猟に行き、そこで銃を学んだらしい。

そして、源一がふとした思い付きで会社を立ち上げる。

それが想像以上に発展したのは製品等はもちろん、源一の人懐こい
性格と優しさ、器量だった。

もともと源一には経営の天性があつたらしいが、それに人の良さが
拍車をかけていた。

成功し、金持ちになった源一は、富豪によくある人を見下した態度
や、人を外見や着ている服の値段で判断するような事はなかった。
それ故どんな人からも好かれ、頼りにされてきた。

結婚したのも暁グループをを設立する前に、大学で知り合った涼子
と結ばれた。

涼子も良妻賢母であり、少々天然でドジなのを笑われるが、夫を影
で支えてきた。

源一も今まで妻一筋で、浮ついた話など微塵もなかった。

その間にできたのが鈴音である。

鈴音も同様、両親の性格の良さと、母に似た可愛らしい整った童顔
の顔立ちに、天然でドジな所を引き継いでいた。

よく親子揃ってドジをやって笑われている。

源一はそんな所まで似なくてよかったのにとよく苦笑するが、二人のそんな掛け合いを見て和むので本当は微笑ましく思っている。

鈴音は幼少からピアノやバイオリンを学び、料理好きな涼子からも料理も学ぶ。

家にはメイドがいるから実質家事はやらなくていいのだが、涼子の指導方法として家事全般はやれるようにしていた。

学校も名門である所へ行き、現在まで上位の学力を保っていたが、体育は生来のドジを遺憾なく発揮し、からっきしの成績だった。

こんな鈴音にも悩みがあった。

年頃の女の子にある恋愛事情には全くついていけなかった。

今もなのだが、中学時代から鈴音がフツてきた男は数知れず。

街を歩けば高確率でナンパをされ、ほとんど困っているのである。

一度しつこくナンパされた事があり、それから少し男性恐怖症になつていた。

たまたまその時は無理やりどかへ連れてかれそうになった所をどこからか男が現れ助けてくれたのだが、その光景が忘れられなかった。

数人で取り囲まれているのに、一度も攻撃を食らう事なくチンピラどもを鬼神の如き強さで完膚なきまで叩き潰した。

その後、固まっている鈴音に困ったような表情をして笑っている男が、

「野蛮な所を見せてすまない。とにかく君は安全な場所まで行くんだ。これからは気をつけるんだよ。」

と言って、そのままタバコをくゆらしながら背を向けて行ってしまった。

鈴音は今まで男は嫌いだったが、少しだけ考えを改めたのだった。

鈴音の世話がかりにその話をしたら、まず危険にさらされた事を驚き、その後になんかいい人がいるもんですね、と微笑んだ。

しかし、いまだに男と接するのは苦手で誰とも付き合った事はなかった。

周りが恋愛の話をしても、鈴音には話せなかったし、周りの女は彼氏が医者だとか、どこそこの企業の御曹司だとか、なにかと金や権威を引き出す。

そんな相手の肩書きだけを見る恋愛はしたくないと鈴音は思っていたのもあり、周りからそんなに可愛いのに何故？とか、鈴音は理想が高いんだねと冷やかされても気にしなかった。

鈴音は特に彼氏が欲しいとも思わなかったし、そのうち運命の人と出会えればいいやとしか考えていないようだった。

そんな単調な毎日が続くと思っていたが、それは脆くも打ち砕かれた。

現に今はこうやって監禁されてるし、もしかしたら命がなくなるかもしれない。

鈴音は今までの事を思い出し少しでも気を紛らわせようとしていた。

FILE 3 スニークミッション

「こちら山蛇、配置に着いた。」

まだ薄暗い中、林に身を潜める影があった。

影は田中、高西の二つ。

各員にはコードネームが与えられた。

田中は山蛇、高西は山鷹というコードネームを授かり、二人一組のバディ行動となっていた。

第2中隊だけでは人数的に難がある。

通信系を確保するために半数以上裂かれ、残りが実質の救出部隊となった。

ほとんどが陸曹だが、少数で陸士も混じっていた。

その中の一人が田中士長だった。

0500時、部隊は配置に着き通信の確保も完了した。

救出部隊は89式小銃を保持し、顔にはドーランで迷彩柄にフェイスペイントをしている。

背中や鉄帽には草を携え擬装をし、森林の中で隠れていれば容易には見つけれないだろう。

「田中、まさか俺達が選ばれるとはな。遺書は書いたか？」

高西が田中の横で伏せながら聞く。

「まあ一応な。って言うてもいきなり書かされても何書けばいいのかわからなかったがな。」

双眼鏡で山を監視しながら田中は高西にそう伝えた。

「そうだな。とにかく俺達はこれから集落に向かうんだが、何か変わった所はあるか？」

田中は高西に双眼鏡を渡した。

「まあ実際に自分で見てみる。敵さんがいるぜ。」

双眼鏡の先には、集落で監視しながらうろつろしてるテロリストが何人もいた。

皆、手にはAK47やMP5等の銃器を持ち、迷彩服を着ている。

「本部こちら山蛇。敵の武装はAK47、MP5、VZ61、ドラグノフスナイパーライフル、果てはG36Cだ。」

田中が無線機を使って本部に連絡する。

「了解。山蛇、集落には何人いる？」

本部から通信が入った。

「集落内にはちらほらと敵が散見されるが、今見えるのは8人だ。」

田中が伝えると本部から新たな指示が下った。

「山蛇、山鷹と共に集落へ近付き偵察を実施しろ。」

「こちら山蛇、了解した。」

田中は無線を終えると高西に話し掛けた。

「今から俺とお前で偵察に向かう。とりあえずあの吊り橋を渡って、森林地帯を抜けよう。」

集落に入るには吊り橋を渡るか、裏の大通りからの二つしかない。

大通りは敵の大軍がバリケードを作り、警備をしているので大々的な戦闘で敵を殲滅しなければ入れそうにない。

しかし、少数の部隊ではリスクが高過ぎる。

だからね敢えて吊り橋から偵察をし、異常がなければそこから進む予定だった。

田中と高西は89式小銃を構えながら慎重に吊橋へと進む。

朝露に濡れた草木や路面が湿った朝独特の気候を醸し出している。

89式小銃に付けられたダットサイト越しに吊橋を見る。特に異常はない。

「よし、クリアだ。吊橋を渡るぞ。」

田中が先を行き、高西を先導する。

「ちょっと待ってくれ、しょんべんがしたい!」

「しゃあねえな、どこか物陰でしてこい。先に行ってるからな。」

高西は申し訳なさそうに草むらへ行き、用を済まし始めた。

田中は警戒しながら吊橋を渡り、半分近くまで来ていた。その時、背後でブチッ！という音が聞こえた。

「ん？音？」

背後を振り替えると、吊橋を支えている紐が一本、また一本とちぎれている。

「まずい！このままじゃ落ちるじゃねえか！チクショウ！！」

田中は脱兎の如く、吊橋の終わりに向かって走りだした。背後で高西の声がする。

「田中あ！走れ！とにかく走るんだ！逃げろお！」

高西が絶叫してる。

田中は、んな事言われなくても分かってるっつの。と余裕がないのに一人思っていた。

背後にはブチブチと紐が切れ、崩れ落ちていく吊橋が田中を飲み込もうと迫っていた。

吊橋の終わりまで後少し、田中は全力疾走していた。

「クソがああああ！」

吊橋に飲み込まれると思った瞬間、ヘッドスライディングよろしく田中は飛び込み、なんとか陸地にたどり着いた。

肩で息をしながら田中は後ろを振り返った。

吊橋はものの見事に崩れ落ち、谷底にその残骸を確認できた。残っているのは吊るためにのばされていたロープのみだ。

「間一髪だったな」

ほっと胸を撫で下ろすと分断された向こうの陸地で高西の声が聞こえた。

「田中！大丈夫か！？」

心配そうに高西が向こう側から叫ぶ。

「ああ、なんとかな！つたくともねえ目にあつたぜ！もう少しで殉職だった！」

田中も高西が無事だったようで軽口をたたく。

「それなら安心したわ！これからどうする？」

言われて気付いたが、今使える唯一の道を潰したことになる。

もう一方はテロリストの厳重なバリケードが張り巡らされた一種の要塞化された道だけだが、そこはまず使えない。

「道がこれ以上ねえって事はまさか俺だけしか行けねえのか？」

田中は愕然とし、落ちた吊橋を眺めた。

「くそっ！この吊橋さえ落ちなければん？」

何気なく見た吊橋にふと違和感を感じた。

田中は慎重に近付切れたロープを見る。

「これは自然に切れた訳じゃねえな 鋭利な刃物で半分ほど切って

あつたのか。」

ロープは不自然なくらい断面がきれいに切られている。意図的に誰かがロープに切れ込みを入れ、誰かが通ると自動的に吊橋が落ちるようトラップにしてあつたのだ。

田中はそれを高西に伝えると高西もそれを確認した。

田中はおもむろに無線機を取り出し通信を開始した。

「H Q、こちら山蛇。偵察中に吊橋を渡ったのだが吊橋が落ちて分断された。山鷹は吊橋を渡っていなかったため、白鳥村側には渡っていない。ちなみに、吊橋のロープには意図的に刃物で切れ込みが入れてあつた模様。以上。」

今あつた事を端的にH Q（本部）に報告すると、すぐに返答が返ってきた。

「こちらH Q、事態は了解した。山鷹には一度こちらに戻るよう通達する。山蛇は引き続き偵察を行いながら白鳥村へ向かってくれ。以上。」

田中は俺一人でやるのかと思い返答をする。

「こちら山蛇、了解した。ヘリ等での増員または航空支援は受けられないか？以上。」

すぐさまH Qから返事がくる。

「こちらH Q、航空支援と増員は受けれない。敵勢力はR P Gを保

有しているとの情報がある。それと、ヘリではすぐに敵に存在が露見されてしまう。厳しいだろうが一人で全ての任務遂行をしてもらいたい。以上。」

一人で全ての任務遂行だあ！？

無茶にも程がある！

映画じゃねえんだからヒーローのようにはいかない。

だがやるしかない。

今動けるのは俺しかない。

俺はただやれる事をするのみだ。

命令されたらそれを遂行する。途中で投げ出したりなんかできない。それが自衛官だ。

とにかく俺の行動によって暁鈴音の命運が決まる。

「こちら山蛇。了解した。ただいまから状況を開始する。」

たった一人だけで救出任務か

無謀にも程がある

やらなきゃ暁鈴音が死ぬだろう。

スリーピングミッション
潜入任務だな。

田中は決意を固め、89式小銃を握りしめ険しい林道を進み始めた。

FILE 4 遭遇

田中は、近くにある小高い丘へ移動し、集落を双眼鏡で覗いていた。眼下には隔絶された集落が広がり、田中は白鳥村の大きさに驚いていた。

吊橋が落ちた今、唯一の道は村の中央へ続く大きな道のみだったが、そこはテロリストによって封鎖され、車両はおろか人さえも通れない。

無理に通ろうとすれば射殺されるだろう。

その道が事実的に封鎖され、白鳥村は今、文字通り陸の孤島となっていた。

「ここからだよく見えるな。中央の道とはあの事か。」

田中は双眼鏡で白鳥村内の偵察を行っている最中、封鎖された道（中央道）を発見した。

その先にはテロリストの車両が何台も配備され、道には手製の要塞が築き上げられている。

道の両端には土嚢が積み上げられ、RPKと思わしき重機関銃が二門配置されていて、その後ろには家具やら廃車両が道を塞ぎ、土嚢も積み上げられている。

そのまた後ろではテロリストの門警の詰所になっていると思われるプレハブが何個もおかれていて、プレハブ内にはパイプ椅子に座って酒を飲んだりタバコを吸ったりしているテロリストが大勢いる事を確認できた。

「アイツら、朝っぱらから酒飲んでやがる。さすがロシア人と言ったところか。」

田中はそう呟くと村内部へ視線を移す。

村の内部はテロリストが銃を持って徘徊していた。

「ん？なんだあれは？」

田中が不信に感じ、ある集団を見た。

数名のテロリストが日本人を6名銃で脅して建物へ入れている。年代も性別もバラバラだ。

「民間人を処刑するのか？急がなきゃヤバイな」

そう思った時、丘の下の方から誰かが数名こつちに向かっているのを発見した。

伏せた体勢のまま、田中は腰につけた弾帯の中からドーランを取出し、顔に塗り付けた。

ドーランというのは、茶色や黒や緑や黄色といった顔にまばらに塗って迷彩効果を高める物である。

さながら自衛官の化粧道具だ。

田中は素早い手つきで、顔を塗り、更に唇、まぶた、耳や耳の中、首、に各色を塗り付ける。

顔を塗っても、耳や首を塗ってないと結局見つかる羽目になるのだ。このドーランという道具は夜間特に効果を發揮する。

夜間というのは白い物は特に目につきやすくなる。

一度試してみてもいいが、夜に肌をさらすのとさらさないのでは歴然の差がある。

田中はその後、少し離れた草むらに移動し、ゆっくりと伏せの体勢に移行した。

足音が段々と近くなる。

何やら話してゐるようだ。

ロシア語が近くになればなるほど、田中の心拍数が上がっていく。

田中との距離約3メートル。

テロリスト達は手にAK47を持ち、防寒のためか顔にはフェイスマスクをしている。

（こいつら期待を裏切らないようなテロリストの格好だな。）

田中はそう思い、見つからないことを祈った。

今少しでも音を立てれば自分はAK47から放たれる7・62mm弾によって蜂の巣にされるだろう。

足音と話し声は段々と遠ざかり、田中はほっとため息をついた。

「多分吊橋を確認しに行ったんだろうな。ヤツらに見られたら誰が通ろうとしたことがバレてしまうな。さあて、どうするか」

田中は考えた挙げ句、取り敢えず今は無視する事にした。

相手は3人でアサルトライフルを持っている。

ヘタにやりあわない方が得策だろう。

田中はまた場所を移動して、丘を警戒しながら下る。

木立に囲まれた場所で腰を下ろし、弾帯のタバコケースからタバコを一本取り出してジッポライターで火を着けた。

あまり戦場でタバコはよくないのだが、田中は張り詰めた気をほぐすために一服も必要だと考えていた。それにここは敵も通らないだろう。地面には足跡が一つもない。

田中はタバコをくゆらせながら今後の行動を考えていた。

（まずはテロリストの手薄な場所から侵入するでしょう。南側から侵入するのがよさそうだ。その後、村を偵察。テロリストは一人で排除するのが難しいから二の次だ。今は暁鈴音の捕われているあのかでかい屋敷に潜入して暁鈴音の位置を特定しなければならんな。）

田中は紫煙をうまそうに吐き出し携帯灰皿にタバコを捨てた。さすがにそこらに吸殻を捨てると見つかる可能性がある。

田中はリュックから陸自迷彩柄のテープを取出し、89式小銃に巻き始めた。

銃もテープ等を巻いて擬装すると見つかりにくくなる。ストックとハンドガード、マガジンに滑り止めの機能のついたテープを貼ると、握りしめ感じを確かめる。

満足した田中は89式小銃を握りしめ村へ向かって進んでいった。

「こちら山蛇。ただ今白鳥村へ向けて前進中。先ほど、テロリストと思われる集団に遭遇した。以上。」

田中は無線機で本部に連絡を入れるとすぐに返信された。

「こちらH Q。了解した。大丈夫だったか？詳しく報告せよ。」

「こちら山蛇。草むらに伏せていたのでバレなかった。テロリストは3人。AK47で武装し、多分吊橋の方面に巡察に行っただと思われる。以上。」

「こちらH Q。把握した。引き続き前進してくれ。」

田中は、話してる相手が自分の小隊の上官だなど思いながらどこか安心した。

「こちら山蛇。了解した。引き続き任務を続行する。」

そのまま集落へ続く道を歩くと、集落の向こうにある大きな屋敷を目指した。

「とにかくあそこまで行かなければならんな。だが昼間に村へ入るよりも夜間に潜入する方が無難か。偵察しながら様子を伺ってみよう。」

89式小銃を構えながら森を進んで行くと、前方からまたしてもテロリストが二人こちらに歩いてきている。

（またかよ！取り敢えず隠れてやり過ごそう）

田中は木が生い茂った中に身を潜めた。

その時、甲高い叫び声が聞こえ、テロリストが手に持った拳銃を構えて辺りを警戒し始めた。

（なんだ今の声は？人間にしては動物みたいだったな。にしても、状況が悪くなったぜ）

身を潜めながら89式小銃をテロリストに向けて構える。安全装置をゆっくり外し、タ（単発）に合わせた。

テロリストに狙いを定めると、ふいにテロリストの側面から何かが飛び出してきた。

それは、半裸の女だった。

むき出しにされた体からは胸を曝け出し、一見した所こいつは狂ってるのではと思える出で立ちだった。

「まさかテロリストに捕まえられてた人間が逃げ出してたのか？ならば助けなければ！」

田中が動こうとした瞬間、意外な事が起きた。

ふいを突かれたテロリストが拳銃を向けようとした刹那、女は相手を押し倒して一気に喉元に噛み付いた。

男は必死になって抵抗しようとするが虚しく、女が喉笛を噛みちぎった。

あふれ出る鮮血を体一面に浴び、女の白い身体が赤く染まった。それを見たもう一人の男が腰を抜き、後退りする。

女は食い千切った男の傷口に指を突っ込み中身を抉る。ぐちゃぐちゃという湿った音がこちらにも響いてくる。

その後、首を捻り力任せに引きちぎった。

胴体からあふれ出る鮮血は辺り一面を真っ赤に染め、枯葉をも赤く彩る。

男がロシア語で叫びながら背後へと後退るとちぎれた首を舐め回していた女は首を捨て、新たに獲物を選定した。

「おいおい　こいつ狂ってるにしてはやりすぎてないか？」

田中は愕然としながら目の前で行われている殺戮を、ただただ見るしかできなかった。

田中も自衛官だ。故に凄惨な死体もその手の教育でプロジェクターを使って見させられたが、生でこのような殺戮を見せられるとは思ってもいなかった。

後退りする男は努力虚しく捕まえられ、同じように首を噛みちぎられ絶命した。

その後、女は周りを見渡している。
気配がしたのだろうか？

田中は額から冷や汗を流し息を潜める。

（襲ってきたら発砲するしかないな　だが銃声でテロリストにバレる事は避けたい。万事休すだ！）

キョロキョロと辺りを見渡している女を観察すると、おかしな点が目についた。

まず、あの女は元々奇形なのか？

皮膚は爛れ、あちこちから何かをポロポロとこぼしている。

手も異常な程長い。

顔もしわだらけで落ち窪んだ眼窩からは爛々と光る目が獲物を捜し求めている。

醜い顔だ。

一言で言えば、

「化け物」だった。

化け物はしばらく探していたが、田中を見つけれなかったようで森の奥へと去っていった。

田中は10分程様子を見て戻ってこないのを確認すると、死んだテロリストの下まで向かった。

テロリストは凄まじい苦痛の表情で絶命している。

大量に出血したせいか、白人だったのにそれ以上の白い肌になっていた。

「ひでえなこりゃ」

田中は苦虫を噛み潰したような表情をし、テロリストから視線を外した。

テロリストの足下に落ちている拳銃を手に取り確かめる。

拳銃は、コルトガバメントM1911A1だった。

口径は45口径、弾は45ACP弾、装弾数7発の大型拳銃だ。

第二次世界大戦で米軍が使用し、それから半世紀程は米軍の制式採用拳銃だった。

信頼性も高く、威力も申し分ない。

死体のポケットからはマガジンが大量に出てきた。

銃に装填されてるのを含め、合計7個だ。

田中は、マガジンを胸に装備したアサルトベストのマガジンポーチに全て入れた。

もう一つの銃はロシア製のマカロフだ。

正式名はP M。弾薬は9mm×18で装弾数は8発。

ロシアで使われている小型の拳銃だ。

反動が比較的小さく、扱いやすい。

この男もマガジンを計五つ持っていた。

田中は男からレッグホルスターを取り、自分に装着し、ガバメントをホルスターに収めた。

マカロフはもう1つのホルスターを奪い、リュックに入れた。

「これでよしと。ライフルだけじゃ近接戦闘ができないからなにしても、敵はテロリストだけじゃないのか？あの化け物はなんだ？とにかく俺は進まなきゃならん。」

田中は、改めて装備を点検し、集落へ向け前進した。

FILE 4 遭遇（後書き）

なかなか話が進まないんですがすみません。今までが序章的な物なので、これからが本番だと思って下さい。暖かい目で見守ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5137f/>

SOLITUDE WAR

2010年10月8日12時36分発行